

「ラストピース」

第5話

水瀬真理佳

へ登場人物一覧へ

鈴木理菜（9）（18）大学1年生

高橋湊（20）（22）理菜のアパートの隣人

花村夏凜（18）理菜の親友

市川拓也（18）理菜の親友

白水透（51）（54）バーのマスター

佐々木俊哉（41）（45）ニュースサイトの

編集長

塚目凜子（31）（34）護身術の師範

竹内魁（29）高橋の兄

高橋正雄（69）？

教授

刑務官

○三田大学・全貌

理菜N「1ヶ月半近くあった夏休みは一瞬で  
終わり、1年の後期がスタートした」

○同・学習スペース

ノートや授業資料を広げて勉強してい  
る鈴木理菜（18）と親友・花村夏凜  
（18）。

しかし理菜は難しい顔をしてスマホを  
見ている。

夏凜、ノートから顔を上げて、

夏凜「何見てるの？」

理菜「いやあ……24日ね、命日だからやっ  
ぱり長野帰りたくて。電車とかバス調べて  
たの」

夏凜「そっか、テスト被っちゃってるもんね」

理菜「テストの時間が微妙だから、バスも電  
車も時間帯が微妙なんだよね。次の日もテ  
ストだから絶対帰って来なきゃいけないし」  
夏凜「お母さんたちは？」

理菜「2人とも仕事あるし、私もテスト重な  
ったから、週末にみんなで行こうねって話  
で落ち着いたの」

夏凜「レンタカーでも借りて送ってあげたい  
けど、私たちまだ誰も免許持ってないしね」

理菜「だね」

夏凜「あ、湊くんバイクで送ってもらうの  
は？」

理菜「いやいやいや！ いいいい申し訳ない  
し。事情話すのも、ね……」

夏凜「んー……」

高橋「俺がどうかした？」

と、高橋湊（22）がやってくる。

理菜「（わざとらしく）あ、湊くん！ 今日  
見かけないから心配してたんだよ」

高橋、不審そうな顔で理菜を見る。

高橋「なんか俺邪魔だった？」

と、離れようとする。

理菜、高橋の腕を引き止める。

理菜「そんなことない！ ここ座って」

理菜、高橋が座る椅子を引く。

高橋、大人しく座る。

高橋、説明を求めるような顔で夏凜を見る。

夏凜、笑顔で誤魔化す。

理菜、2人をよそに、

理菜「さ！ 勉強勉強！」

と、ペンを持つ。

○同・キャンパス内

理菜、高橋、夏凜が並んで門に向かって歩いている。

夏凜、立ち止まる。

夏凜「そうだ。私学務課行かなきゃいけないんだった」

理菜「オツケー」

と、方向転換しようとする。

夏凜「時間かかるかもしれないから先帰って！ またね」

と、手を振って戻って行く。

理菜「バイバイ……」

理菜と高橋が再び歩き出す。

今度は高橋が立ち止まる。

高橋「……忘れものした」

理菜「さっきのどこ？」

高橋「かも。悪いけど先帰ってて」

と、走って行く。

理菜「え……」

と、高橋の背中に向かって手を伸ばす。

理菜、肩を落として歩き出す。

○同・建物前

扉から夏凜が出てくる。

高橋「花村さん！」

夏凜「湊くん？ 理菜と帰ったんじゃ」

高橋「さっき2人が話してたこと気になって」

夏凜「（苦笑して）あぁ……」

と、目を逸らす。

高橋「9月24日がどうか聞こえたんだけ

ど」

夏凜「……実は湊くんに折り入って相談、と  
いうかお願いがあるの」

高橋、頷く。

### ○同・食堂

夏凜と高橋が向かい合って座る。

夏凜「私が今から話すことは理菜には絶対に  
言わないでくれる？」

高橋「分かった」

夏凜「細かい事情は話せないんだけど、9月  
24日に理菜がどうしても長野に行きたい  
の。ただその日私たち午後イチでテストで  
しょ？ その前後でちょうどいいバスとか  
電車の時間がないみたいで。次の日もテス  
トだから泊まるわけにもいかないし、どう  
しようって悩んでるっぽいの」

高橋「なるほど。それで俺ならバイクで送迎  
できるから」

夏凜、申し訳なさそうに頭を下げる。

夏凜「なんかごめんなさい！ 湊くんを足に

使うみたいにな……でも、理菜にとってすごく大事な用事で、なんとかしてあげたくて」

高橋「いいよそれくらい。長野なら頑張れば3時間もかからないし」

夏凜「ほんとに……ありがとうございます！　理菜喜ぶと思う！」

高橋「理菜にはきっきの話聞こえてたことにして話してみるよ」

夏凜、立ち上がってお辞儀する。

夏凜「よろしくお願いします！！」

高橋も立ち上がる。

高橋「じゃ」

と、去ろうとする。

夏凜「湊くん！」

高橋、足を止めて振り返る。

夏凜「あともう1つだけお願いが……」

高橋「？」

夏凜「理菜が長野に行って何をするかとか、そういうのは湊くんからは絶対に聞かないでほしいの。凶々しいお願いなのは十分分

かっ  
てる  
んだ  
けど、  
どうか  
お願い  
します」  
と、  
丁寧  
に頭  
を下  
げる。

高橋「約束する。俺はただの送り迎えに徹するよ」

夏凜、安心した笑顔で、

夏凜「ありがとう！」

○アパート・理菜の部屋の中（夜）

理菜、ソファに体育座りしてスマホを見ている。

古諏訪町までのタクシー料金を検索、

「8万」と。

すぐにページを閉じる。

理菜M「しようがない。週末にお母さんたち

と行くんだから」

チャイムの音がする。

理菜、心当たりがない。

部屋を見渡し、近くにあったフロアワイパーを持って音を立てないように玄関へ向かう。

恐る恐るドアの覗き穴を見ると高橋が立っている。

理菜「湊くん」

理菜、慌ててドアを開ける。

高橋「ごめん急に」

高橋、理菜が持っているフロアワイパーに視線がいく。

理菜、慌てて自分の後ろに隠して、

理菜「（恥ずかしそうに）知らない人かと思  
って、一応……」

高橋「（ニヤリとして）偉いじゃん」

理菜「ふふ。湊くんどうかした？」

高橋「いや、昼のことなんだけど……ごめん、  
実は花村さんとしてた会話聞こえてた」

理菜「あ……（目を伏せる）」

高橋「よく分かんないけど、9月24日に長  
野に行く足が欲しいんだろ？ バイクでよ  
ければ連れて行くよ」

理菜、表情が明るくなるが言葉に詰ま  
る。

理菜「いや……でも……」

高橋「別に何しに行くとか、そんなの話さなくていいから。迎えるの時間と場所さえ教えてくれれば、理菜が用事の間はテキトーに時間潰してるし」

理菜、目を泳がせて迷っている。

高橋、理菜の両頬をプニつとつまむ。

理菜「は」

高橋「なに氣遣ってんだよ。いいから遠慮せず甘えてみ」

理菜、口角を上げる。

理菜「（頬を挟まれたまま）私を長野まで連れて行ってください（ください）」

理菜、ひよつとこのような顔になっている。  
いる。

高橋「（ニカッと笑って）了解」

高橋、まだ手を離さない。

高橋「フツ……その顔だいぶ面白い」

高橋、スマホを構えて理菜の写真を撮って見せる。

理菜「あ、ヒドイ！ 私だって」

理菜、高橋の両頬を手で挟む。

理菜「あははっ。湊くんもだいぶヤバイよ。

貸して」

理菜、高橋のスマホで高橋の写真を撮

って見せる。

高橋「いや理菜の方がヤバいだろ」

理菜と高橋、スマホの画面を覗き込み、

お互いの写真を見比べながら笑い合う。

○三田大学・講義室内

学生が1列ずつ綺麗に座り、テストを  
している。

教授、前で時計を見ながら、

教授「はい、やめ。後ろから前に送ってくれ」

学生が答案用紙を順に前へ送る。

理菜、高橋、夏凜もそれぞれの席で用

紙を前へ送る。

○同・キャンパス内

夏凜「どうだった？ テスト」

理菜「なんか思ったよりイケたかも」

夏凜「えーすご！ 湊くんは？」

高橋「まあ普通くらい？」

3人、バイクの駐車場に着くと親友・

市川拓也（18）がいる。

理菜「拓也？」

市川「∴長野行くなって聞いたから。見送り」

理菜「うん。湊くんが一緒に行ってくれるこ

とになって」

市川「なんもできなくてごめんな」

理菜「謝らないでよ。来てくれてありがとう」

高橋、バイクに跨ってヘルメットをか

ぶる。

高橋「理菜」

と、ヘルメットを渡す。

理菜「ありがとう」

と、ヘルメットをかぶり高橋の後ろに

跨る。

市川「∴∴理菜のこと、頼んだ」

高橋「うん」

夏凜「理菜をお願いします」

と、頭を下げる。

理菜「じゃあ行ってくるね」

と、バイクが走って行く。

市川、早々に背を向けて歩いて行く。

夏凜、心配そうな顔で市川を追いかける。

### ○高速道路

高橋と理菜が乗ったバイクが颯爽と走っている。

### ○霊園・駐車場（夕方）

高橋のバイクが停まる。

理菜、ヘルメットを脱いでバイクを降りる。

高橋「じゃあ俺テキトーに走ってるから、終わったら連絡して」

理菜「あの……！もし良かったら、一緒に

来てくれる……？」

高橋「いいの？」

理菜、頷いて、

理菜「湊くんさえ良ければ」

高橋「分かった」

と、ヘルメットを脱ぐ。

○同・墓地（夕方）

墓石の間を進んで行く理菜と、後ろを歩く高橋。

「前田家之墓」の前で止まる。

理菜、しゃがみ込み、花を挿して手を合わせる。

その後ろで立ったまま高橋も手を合わせて目を閉じる。

× × ×

理菜、立ち上がって後ろを見ると、高橋が目を閉じて手を合わせている。

高橋、ゆっくりと目を開ける。

理菜、優しく微笑む。

理菜「ちよつと散歩しない？」

○同・丘の上（夕方）

理菜と高橋、小高い丘の上で足を止める。

眼下には夕日でオレンジ色に染まった諏訪湖が一望できる。

理菜「なんの説明もしないでごめんね。いきなりびっくりしたでしょ」

高橋「いや……」

理菜「さっきのお墓ね、私の実の両親と飼ってた犬がいるの」

高橋「……」

理菜「9年前、私を置いてみんないなくなっちゃった」

高橋「そう、だったんだ……」

理菜「あの日は1日中雨が降ってた。私は部屋で宿題をしてて、夜ご飯の時間になったから階段を下りたの。（声が震え始める）1階のリビングがやけに静かで、おかしい

と思ったんだ。(涙を溢しながら)そして  
らっ、階段の下でっ……」

理菜、呼吸が乱れてくる。

高橋「理菜。いいよ無理して話さなくて」

と、理菜の手を握る。

理菜「黒いフード付きのジャンパーを着て、  
とにかく全身黒かった。ぐったりしたラリ  
ーを何度も何度も刺して。近くにママも倒  
れてて、血がたくさん床に広がって、体も  
ぐちゃぐちゃでっ、パパもっ」

高橋「理菜！もういいから！」

と、理菜を強く抱きしめる。

理菜、高橋の背中に手を回し、声を上  
げて泣き続ける。

高橋M「俺の腕の中で泣き続ける理菜が、あ  
の時の9歳の少女と重なって、俺は胸が張  
り裂けそうだった」

高橋、抱きしめたまま理菜の頭を撫で  
る。

○大通り（夜）

陽が沈みかけて辺りが暗くなっている。  
ライトをつけて走る車の間をバイクで  
走る理菜と高橋。

理菜M「あのあと、子供みたいに泣き続ける  
私を、湊くんはずっと抱きしめてくれた」

理菜、高橋の背中にそっと頬を寄せる。  
高橋、それに気づき、切なそうな表情  
のまま前を見る。

歩道を歩く高橋正雄（69）と高橋の  
バイクがすれ違う。

高橋正雄は作業着姿で、缶ビールの入  
ったビニール袋を手に提げ歩いている。  
しかしお互い気が付かない。

○高橋家・外観（夜）

所々塗装がはげている平屋の木造住宅。

○同・玄関（夜）

高橋正雄、郵便受けの郵便を取り出し、

引き戸式の扉を開けて中に入る。

○同・居間（夜）

高橋正雄、電球から伸びた紐を引いて電気をつける。

部屋には薄い絨毯が引かれ、中心にちやぶ台、その前にはテレビがある。ちやぶ台の上には封が開いたつまみとビールの空き缶。

高橋正雄、買ってきた袋をちやぶ台の上に置いて座り、郵便を確認。

チラシや光熱費の請求書の中に「高橋正雄様」と書かれた茶封筒。

送り主は「竹内魁」と。

高橋正雄、ハサミで開封して手紙を読む。

「拝啓 高橋正雄様 ご無沙汰してきます。お身体崩されていませんでしょうか。突然の便りになってしまったこと、どうかお許しく下さい。実は」

高橋正雄、目を大きく見開く。

「もし俺がいなくなれば、湊はこの世に1人ぼっちになります。どうか気にかけていただければ幸いです。最後になりましたが、身寄りのなかった湊を引き取ってください、本当にありがとうございます。うございしました。心より感謝します。このことはどうか正雄さんの胸だけに留めてください。竹内魁」と。

高橋正雄、便箋をぐしゃっと握りしめる。

その手は震えている。

○居酒屋・店内（夜）

市川と夏凜が一席で酒を飲んでいる。

夏凜「理菜たち、もう長野出たかな？」

市川「（心ここに在らず）ああ……」

市川、口数が少なく、枝豆を食べながらポーツとしている。

夏凜「私がおせっかい焼いて、勝手に湊くん

に話を持ちかけたの。ごめん……」

市川、頷く。

市川「それが一番良かったんだよ……：実際俺は理菜のために何もできてない。散々高橋湊に気をつけろとか言ってきたのに、結局アイツを頼らせるしかなかった自分が情けねえわ」

市川、グラスを強く握る。

夏凜「そんなことない。理菜は拓也のことすごく信頼してるよ。拓也も分かってるでしょ？」

市川「それは単に、一緒にいた時間が高橋湊より長いからだろ」

夏凜「あーんもう！ 拓也らしくもない！ そんなに理菜のそばにいるのが辛いなら、離れればいいじゃん」

市川、夏凜をじっと見つめる。

夏凜「できないよね？ 分かってる」

市川、テーブルの上に項垂れる。

市川「脈ナシって分かってても、結局離れら

れないのは俺の方なんだよなあ」

夏凜「相手の気持ちはもちろんだけど、自分の気持ちすら思い通りにはいかない。それが恋愛のほろ苦いとこだよねえ」

市川「（目を点にして）なんか急に深イイこと言うじゃん」

夏凜「これが中高6年間朝読書で少女マンガ読んだ成果よ（ピース）」

市川「（笑いながら）マンガかよ」

夏凜「そういえば理菜が、拓也がたこで、自分が衣で、たこ焼きがどうか訳わかんないこと言ってたけど、あれなんなの」

市川、フツと笑って、

市川「ああーあれな。ちなみに夏凜もたこだから」

夏凜「（笑いながら）やだ私を変なのに巻き込まないでよ」

2人、談笑する。

○バー・店内（夜）

扉が開いて高橋が入ってくる。

高橋「お疲れ様です」

カウンターには編集長・佐々木俊哉

(45)と師範・塚目凜子(34)。

テーブルにもちらほら客がいる。

凜子「おかえり〜(手を振る)」

佐々木「やっと来たな」

白水「今日は来なくていいつつたろ」

高橋「いや。急に無理言っすいませんでし

た。準備してきます」

高橋、考え事をしているような様子で

バックヤードに入って行く。

凜子「なんかあったのかな？」

佐々木「往復バイク走らせて疲れたんだろ」

マスター・白水透(54)、険しい顔

で考え込む。

○同・店内(深夜)

客は誰もいない。

白水はカウンターの内側でグラスを拭

き、高橋はテーブル席を拭いている。  
高橋、ふとカウンターの一席を見つめる。

○（高橋の回想）バー・店内（深夜）

T「3年前」

カウンター席に座る高橋（20）と白水（51）。

カウンターには古諏訪夫婦殺害事件や広尾台の殺人事件の記事や資料が広がる。

いくつもの付箋が貼られ、書き込みもたくさんある。

そのうちの1枚の資料には、前田家の2階廊下から衣装部屋に続く血の痕の写真。

高橋、資料を指差しながら、  
高橋「この血痕って、犯人が部屋の中まで入ったってことですよね？」

白水「多分な」

高橋「理菜がここに隠れてたってことは、犯人の顔を見てるはずだ。ちゃんと魁の写真見せれば、やったのは魁じゃないって証言できるんじゃない？」

白水「それはまず無理だな」

高橋「なんでですか！」

白水「6年も前の記憶だぞ？　しかも当時彼女は事件のショックで何も覚えていなかった。それを今更『犯人はこの人じゃなかった』なんて言ったとしても、証言としては信憑性がないと判断される」

高橋「あーくそ！」

と、むしゃくしゃしながら、広尾台の事件資料に目を通す。

白水「2つの事件に共通しているのは、被害者たちがいずれも比較的裕福な家庭だったことと、その殺害方法。一家全員が刃物で滅多刺しで殺されてる。どちらも周囲とトラブルはなかったし、犯人は貧困家庭出身で、ターゲットを定めた計画的な犯行だと

考えるのが妥当なんだが」

高橋、何かに気づいた顔。

高橋「（独り言のように）いや、違う……父親に母親、子供2人……今回の広尾台では、確かに家族全員が殺されてる。なのになんで古諏訪の時は、父親と母親と犬だけだったんだ？ だって犯人は理菜が隠れてたこの衣装部屋まで来てんのに。なんで理菜のことは殺さなかった？」

白水「あえて殺さなかったか、あるいは殺せなかったか……例えば時間的な制限があったのか、犯人が慌てたのかもしれない」

高橋、顎に手を当てて、

高橋「もし犯人の中で、古諏訪の事件は失敗だとしたら……？ だから2件目の広尾台では1人残らず殺してる。最初の反省を生かしたからだ！」

白水「それはまた随分偏った推測だな」

高橋「理菜を殺さなかったのはやつにとってミスだ。だから、犯人は今も理菜を探して

る。殺す機会を伺ってるかもしれない！  
理菜のそばにいれば、いずれ犯人が向こう  
から来る！」

と、立ち上がる。

白水「落ち着け湊。今回の広尾台は模倣犯の  
可能性だってある」

高橋「（感情的に）だって先生言いましたよ  
ね？ 殺人の衝動は抑えられないって！  
また動き出したって！ 高校中退した俺で  
も分かりますよ、この2つの事件は同じ奴  
がやったんだって！」

白水、ため息をつく。

白水「じゃあ彼女を探し出して、『真犯人が  
君を狙ってるんだ』ってお前の妄想じみた  
推理を説明すんのか？ 彼女に張り付いて、  
ヤツが現れんのをずっと待つのか？ 大体  
お前、さっきから理菜理菜って、やけにこ  
の子にこだわるな？」

高橋、勢いがなくなる。

高橋「……昔会ったことあるんです」

白水「は？」

高橋「事件の後、よく学校サボってた公園に女の子がいたんです。そのうち話すようになって。ある日『パパもママもラリーも死んじゃった』って泣き出しました。あの事件の被害者なんだってすぐに分かりました」

白水「それからどうしたんだ？」

高橋、首を横に振る。

高橋「ちょうど母さんが事故で死んで、俺はしばらく公園に行けなかった。その間に理菜は東京に引っ越してました。それっきりです」

白水「（ホツとして）そうか」

高橋「犯人は絶対に理菜を探してる。いや、もう見つけてるかもしれない」

白水「だとしても、お前が出る幕じゃない」

高橋「じゃあ事情を話せば警察が動いてくれるのか？ 違うだろ！」

と、熱くなる。

白水、口を噤む。

高橋「今のところ、あの子が唯一の手がかりだし、あの子を犯人から守れるのは俺らだけだ！」

白水「そうだとしても、安易に遺族と接触するのは賛成できない。いいか、魁が逮捕されて刑も確定した。古諏訪の事件は一度終わったんだよ！俺らはそれを蒸し返そうとしてる。その意味が分かるか？」

高橋「意味……」

白水「遺族にはまた辛い思いをさせることになるんだぞ」

高橋「……でも真犯人はまだ捕まってない！遺族だってそれを知れば！」

白水「分かってる。だけど俺らがいきなり事情を説明したって、信じてもらえるわけがない。お偉い裁判官様が、犯人は魁だって決めたんだぞ？裁判の判決っていうのは、それくらい重くて絶対的なものなんだよ。それなのに俺らは、絶対に答えを間違えちゃいけない人に、あなた間違えてましたよ

って言おうとしてんだ」

高橋、ゴクリと息を呑む。

白水「普通にヤバいだろ？ 冤罪を証明するっていうのは、それくらいとんでもないことなんだよ。だからこそ、慎重にやるべきなんだ。そんな簡単な話じゃない」

高橋、ゆっくり頷く。

高橋「……はい」

白水「ほら。今日は遅いからここまでにしよう」

と、バックヤードに入って行く。

高橋、白水がいなくなったのを確認して、資料の山を漁る。

理菜の父・鈴木健一と母・鈴木香澄の写真とデータが載っている1枚の紙を見つける。

高橋「（呟くように）ダメって言われると、余計気になるんだよな」

高橋、スマホで「鈴木理菜」と検索。検索結果をスクロールすると、三田大

学附属中学高等学校のパンフレットの  
在校生紹介ページが出てくる。

「高校1年生 鈴木理菜さん」この学  
校の授業は教科書の枠にとらわれず、  
より実践的な内容を扱います。授業の  
形式も、先生方による一方向伝達式で  
はなく、ディスカッションや生徒によ  
る主体的なものが多いのが特徴です。  
そのため、授業の予習復習は大変です  
が、勉強するのがとても楽しいです。  
大学では国際文化を学びたいと思って  
います」と。

高橋、目を大きく見開いて、  
高橋「（眩くように）いた……！」

○バー・店内（深夜）

高橋（22）、テーブルを拭く手を止  
めて、ポーツとカウンターを見ている。

白水「湊！」

高橋「は、はい！」

と、白水（54）の声で我に返る。

白水「どうした？」

高橋「すいません」

高橋、テーブルを拭き終えてカウンタ  
ーに戻る。

白水「どうだった？ 久々の故郷は」

高橋「…手合わせてきました。理菜の両親  
に」

白水「（怪訝な顔で）え？」

高橋「俺は何も言ってませんよ？ 本人が自  
分から事件のこと、話し始めたんです」

白水「そうか…」

高橋「墓の前で泣きじゃくる理菜見て、昔マ  
スターに言われたことの意味がようやく  
やんと分かった気がした。俺は絶対に魁の  
冤罪を証明したい。でもそれは、理菜に事  
件のこと思ひ出させて、また泣かせること  
になるんですよね。だからってやめること  
はできないけど。ただ、なんか苦しいって  
いうか。正しいこととしても、みんなが幸せ

になれるとは限らないんだなーって」

白水「お前がここでやめたとしても、誰も責めたりしない。でももし、このまま茨の道を進むなら、理菜ちゃんとは距離を置くべきだ。じゃないと、この先苦しくなるのはお前だぞ」

高橋「分かってます。(明るく)でも、大丈夫ですよ。ちゃんと割り切れるんで」と、バックヤードに入る。

白水「バカヤロー」  
と、呟く。

### ○刑務所・面会室

ガラス越しに仕切られた部屋。

高橋正雄、パイプ椅子に座っている。ガラスの向こう側に、刑務官に連れられて高橋の兄・竹内魁(29)が入ってくる。

グレーの作業着を着ている。  
頬はやつれ、体の線は細く骨ばねしい。

高橋正雄、立ち上がる、  
竹内「お久しぶりです」  
と、丁寧にお辞儀をする。